

1 林業経済学会 2024 年春季大会論文

2 テーマ：林業従事者問題の新たな展開の可能性

3 阿蘇地域における草原の野焼き支援ボランティア活動の変遷

4 公益財団法人阿蘇グリーンストックを事例として

5 町田怜子<sup>1</sup>・増井太樹<sup>2</sup>・茂木もも子<sup>1</sup>

6 1. 東京農業大学地域創成科学科

7 2. 公益財団法人阿蘇グリーンストック

8

9 Transition of Volunteer Activities of Controlled Burning for Grassland in the Aso

10 Region: A Case Study of the Aso Green Stock Foundation

11 Reiko MACHIDA<sup>1</sup>・Taiki MASUI<sup>2</sup>・Momoko MOGI<sup>1</sup>

12 1. Department of Regional Regeneration Science, TOKYO UNIVERSITY OF

13 AGRICULTURE

14 2. Aso Green Stock Foundation

15

16 和：要旨（300～500 字）

17 本研究では、都市農村交流を通して地域の自然環境を保全することを目的に 1995 年に

18 設立された「公益財団法人阿蘇グリーンストック」及び関連する野焼き支援ボランティア

19 の活動変遷を分析し、地域住民との連携での自然資源管理活動の展開特性について考察し

20 た。その結果、「野焼き支援ボランティア派遣の活動始動期（1991 年～1999 年）」、「野焼き

21 支援ボランティアの会の誕生・都市農村交流事業への展開期（2000 年～2005 年）」、「阿蘇

22 の草原再生のステークホルダーと野焼き支援ボランティア会員の拡大期（2005 年～2011

23 年）」、「野焼き支援ボランティアの安全管理の強化と災害時の地域復興期（2012 年～2015

24 年）」、「熊本地震からの生活再建と観光振興による草原再生期（2016 年から 2019 年）」、「多

25 種業とのコラボレーションによる草原保全期（2020 年～2023 年）」の 6 つの時代に区分

26 した。そして、活動が継続してきた要因を①牧野組合に野焼き支援ボランティアを派遣す

27 るという活動目標の明確性と安全管理を含めた野焼き支援体制の構築、②阿蘇の農畜産業

1 を基軸とした都市農村交流事業の展開, ③災害等の困難な局面にも重要なステークホルダ  
2 ーとして, 地域の再生・復興をけん引してきた点と考察した。(498字)

3

4 英: This study analyzes the evolution of the activities of the Aso Green Stock Foundation,  
5 a volunteer organization formed in 1995 mainly by urban residents to support the  
6 burning of wild land in order to conserve the local natural environment through urban-  
7 rural exchange, and examines the characteristics of the development of natural  
8 resource management activities in collaboration with local residents. The research  
9 method was based on a literature review of the foundation's newsletter, which was  
10 divided into periods based on (1) changes in management in the activities of the Noyaki  
11 Volunteers and (2) the creation of new projects in cooperation with the local agriculture  
12 and livestock industry. As a result, the 28 years of activities of Aso Green Stock were  
13 divided into six periods: "The period of starting activities of dispatching volunteers for  
14 burning wild land (1991-1999)," "The birth of the association of volunteers for burning  
15 wild land and its development into an urban-rural exchange project (2000-2005)," and  
16 "The period of expansion of stakeholders of grassland restoration in Aso and members  
17 of the volunteer association for burning wild land (2005-2011). "Enhancement of safety  
18 management of volunteer wildfire volunteers and local reconstruction after disasters  
19 (2012-2015)," "Grassland restoration through livelihood reconstruction and tourism  
20 promotion after the Kumamoto earthquake (2016-2019)," and "Grassland conservation  
21 in collaboration with multispecies industry (2020-2023)" (215words)

22 和: キーワード (5つ)

23 草原, ボランティア, 野焼き, 都市農村交流, 市民

24 英: キーワード (5つ)

25 Grassland, Volunteer, Fire Controlled Burning, Urban-Rural Exchange, Citizen

26

27

## 1 I. はじめに

2

3 農村漁村の森林や里山，原野などの自然資源管理は，地域社会の中で生業を通じて営ま  
4 れてきた。しかし，戦後の急激な社会構造やライフスタイルの変化に伴い，維持管理の担  
5 い手不足が深刻な課題となっている<sup>1)</sup>。一方で，1980年代後半から「業」を越えて市民が  
6 森林や里山のボランティア活動に参加する事例が増え<sup>2)</sup>，2000年以降は協働型管理のパー  
7 トナーとして市民による自然資源管理活動への期待<sup>3)</sup>が高まっている。

8 林業経済学の分野では，土屋（1999）が地域に根ざした論理を持った市民参加論の展開  
9 を述べる<sup>3)</sup>等，早くから森林を含む自然資源管理と社会との関係性が議論されてきた。山  
10 本（2010）<sup>4)</sup>は，環境問題を担う主体が複雑化する中で，市民や農山村住民からの参加・  
11 協働・分権に基づく森林・環境ガバナンス創出の必要性を提言している。加えて，その市  
12 民運動の形態は，社会に働きかける開放性・社会性を持ちつつ，直接，汗を流す実践性も  
13 兼ね備え共通目的を達成するための参加・協働型であることを述べている。

14 その後も，国立公園に関連してステークホルダーの主体を取り込んだガバナンスや，空  
15 間スケールやそれを担う市民の位置づけ<sup>5) 6)</sup>などの議論が展開されてきた。

16 富井（2017）は，鳩ノ巣フィールドにおける森林ボランティアの語りを分析し，森林ボ  
17 ランティアが，森林・林業・農山村地域の課題や環境問題の解決に向けた実践という大義  
18 のために組織されているものでも，個別の動機にもとづく構想を具体化するものでもなく，  
19 活動参加者が個別の関心，認識によって意味づけを見いだしていく活動であることを示唆  
20 した<sup>7)</sup>。

21 平原（2022）は，自然資源管理に関する市民参加論の国内研究について整理し，2000年  
22 以降，自然資源管理に関する市民参加が広く社会認知され，国内事例も豊富となる中，全  
23 国各地の実践の現場で行き詰まりが見られる様子を述べている。そして，2000年代以降の  
24 市民参加のガバナンス論を分析し，より地域に根ざした論理を持った市民参加論の必要性  
25 を指摘している<sup>8)</sup>。しかし，具体的な市民活動の変遷とその地域との関係性，市民活動の  
26 継続・展開と地域とのかかわりを分析した事例は数少ない。

27 そこで，本研究では，本研究では，都市農村交流を通して地域の自然環境を保全するこ

1 とを目的に 1995 年に設立した「公益財団法人阿蘇グリーンストック」（以下：阿蘇グリー  
2 ンストック）を対象に，活動の変遷を分析し，活動の継続要因と地域とのかかわりとの関  
3 係性を明らかにすることを目的とした。具体的には，阿蘇グリーンストックにおける活動  
4 の変遷について，①野焼き支援ボランティア活動に関する運営の変遷，②地域の農畜産業  
5 と連携した新規事業の創出を軸に時代区分を設定し，阿蘇グリーンストックにおける活動  
6 の継続要因と地域とのかかわりの関係性を検討した。

7 なお本稿で扱う「市民」とは，市民に居住する住民としての市民ではなく，市民を主権  
8 者としての市民（citizen）の位置づけとする。

## 9 II. 研究方法

10

### 11 (1) 阿蘇の草原管理 野焼きと輪地切りに関する文献調査

12 阿蘇の草原管理である野焼きや輪地切りの具体的な作業内容を，「熊本県阿蘇草原維持  
13 再生基礎調査」<sup>9)</sup>，「阿蘇町史 草原と人々の営み」<sup>10)</sup> の文献調査に基づき確認を行った。

### 14 (2) 阿蘇グリーンストックの概要把握

15 阿蘇グリーンストックのウェブページ上で公開されている「公益財団法人阿蘇グリーン  
16 スtock中期構想」<sup>11)</sup>に基づき，阿蘇グリーンストックの構成組織や中長期目標について  
17 文献調査を行った。さらに，2023 年 2 月 15 日に阿蘇グリーンストックの設立当時より勤  
18 務している職員 1 名へのヒアリング調査を実施し，阿蘇グリーンストックの事業概要及び  
19 その変遷を把握した。

### 20 (3) 阿蘇グリーンストックにおける活動の変遷の分析

21 阿蘇グリーンストックが，年 4 回発行している季刊誌「草原だより」について 1999 年  
22 から 2023 年（Vol.4～Vol.95）<sup>12)</sup> を対象に，活動内容に関する記載を把握するとともに，  
23 2023 年 2 月 15 日に上記同様の職員にヒアリング調査を実施した。その上で，①野焼き支  
24 援ボランティア活動に関する運営の変遷，②地域の農畜産業と連携した新規事業の創出を  
25 整理軸として時代区分を行った。

### 26 (4) 阿蘇グリーンストックの活動継続要因の考察と今後の課題

27 28 年間の阿蘇グリーンストック活動内容の展開を，地域との連携の関係性を検討し，阿

1 蘇グリーンストックにおける活動の継続要因と今後の阿蘇地域における草原保全のための  
2 課題を考察した。

3

### 4 III. 阿蘇の草原管理 野焼きと輪地切り

5

6 熊本県阿蘇地域は、27 万年前から火山活動が繰り返され、火山灰土壌で覆われた土地を  
7 形成している。湯本（2002）によると、阿蘇では、縄文時代から人が野に火を放ち草原と  
8 して利用されてきた<sup>13)</sup>。阿蘇のススキやネザサ、ドタシバなどの植生は、牛馬の飼料として  
9 利用され、茅は茅葺の屋根の材料として利用されてきた。また、牛馬の草食べ残しの干し  
10 草は良質の堆肥として利用され、草原は暮らしの中で循環利用されてきた<sup>14)</sup>。

11 阿蘇の草原で飼育されている褐毛和種の和牛は、「あか牛」と呼ばれ、明治期に品種改良  
12 の後に 1994 年に登録された固有種である。あか牛の肉質は、まろやかで黒毛和牛と比べ  
13 脂肪分が少なく健康志向の観点からも注目を集めている。このあか牛は、耐寒性、耐暑性  
14 が優れているため親子放牧がおこなわれ、牛の生産の点から草原が地域形成に貢献してい  
15 る。あか牛は登坂能力もあり、阿蘇地域の波状の丘陵地や山麓傾斜の牧野も移動し草を食  
16 むことができるため、地域経済のみならず、阿蘇に特有の草原生態系の保全にも大きく貢  
17 献している。

18 ここで、元熊本県畜産試験場阿蘇支部長であり、阿蘇グリーンストック理事として阿蘇  
19 の草原保全に尽力してきた大滝典雄（1997）の「草原と人々の営み—自然とのバランスを  
20 求めて」<sup>10)</sup>を引用しながら阿蘇の草原管理である「野焼き」と「輪地切り（防火帯づくり）」  
21 について記述する。

22 阿蘇の草原管理は 3 月に草原だけを燃やし、他の場所に延焼しないように火をコントロ  
23 ールする「野焼き（のやき）」と呼ばれる作業から始まる。野焼きの目的は、植生を草原の  
24 ままに維持するために、森林への遷移の要因となる先駆種とよばれるアキグミやサルトリ  
25 イバラ、ノイバラなどの低木類を火で攪乱して、牛馬の嗜好性が高く地下茎が発達してお  
26 り、野焼きの影響を受けないイネ科のネザサ、ススキ、ドダシバの植物の比率を高めるた  
27 めだといわれている。さらに、野焼きをしてダニを駆除し健全な草原を維持することも

1 目的とされている。

2 野焼きの炎は摂氏 600～800℃と非常に高温であり、さらに延焼速度は毎分 0.28m、風  
3 向きや地形次第では延焼風速が最大 180m/分にもなる。そのため、野焼きは命の危険にも  
4 及ぶ作業であり、安全に野焼きを行うために、延焼防止の作業に多くの人員を要する。ま  
5 た、近年では草原を放牧や採草で利用しなくなったことにより、枯草の残存量が増え、か  
6 っつの野焼きよりも火の勢いが強いともいわれ、延焼のリスクも高くなっているといわれ  
7 ている。

8 阿蘇地域での野焼きは、牧野組合単位にて実施されてきた。野焼きの体制は、牧野組合  
9 長や野焼き経験の豊富な地域住民がリーダーとなり、リーダーを中心とした指揮命令系統  
10 で実施される。リーダーは、着火の際に地形や風向きを正確に読み、野焼きで火をつける  
11 「火引き」と呼ばれる役目を果たす。この「火引き」には、風下から風上に火をコントロ  
12 ールする力が求められ、野焼きの中でも安全管理などの面から重要な役割となっている。

13 着火後には、野焼きの防火帯線付近で多くの人々が火消しの作業を行う。非常に危険な  
14 作業を伴う野焼き作業であるが、年々、安全管理の状況は向上している。火消し作業につ  
15 いては、以前は伝統的にスギ枝やヒノキ枝を使用していたが、現在は、火消棒やジェット  
16 シューター、動力噴霧器が使用されている。また、着火や延焼状況を共有する野焼きの際  
17 の通信手段としては、以前は手信号により野焼き作業の情報伝達が行われていたが、現在  
18 は、トランシーバーや携帯電話を使用して野焼き作業間で密に連携がとられている。野  
19 焼き時に身に着ける服装は、化学繊維の服は高熱によって皮膚に密着する可能性があるこ  
20 とが分かり、現在は難燃素材の服の着用を推奨している。また、野焼きを実施するにあた  
21 り重要な草原管理作業として、防火帯づくりも挙げられる。防火帯づくりは、野焼きを行  
22 う前の秋から冬にかけて実施される。草原と森林等の燃えてはいけな土地との堺にある  
23 草を幅 6～10mにて刈払いし、防火帯とする。この作業は、阿蘇では「輪地切り（わちき  
24 り）」と呼ばれている。さらに、輪地切りを行った数日後には、刈って乾燥した草を焼いて  
25 防火帯を完成させる作業を行う。この作業は「輪地焼き」と呼ばれている。輪地切りと輪  
26 地焼きは厳しい残暑の中で急傾斜の草原にて作業を行うころから、負担の多い作業となっ  
27 ている。そのため、現在は輪地切りについては刈払い機を使用しているほか、ブルドーザ

1 一で土壌を押しつけて防火帯にしたり，舗装して車両が入れるような防火帯づくりに取り組ん  
2 でいるが，今でも阿蘇全体で 360 km程の防火帯を毎年人力で作成している。

3 これらの作業は草原維持にとって重要なものであるが，1970年代から畜産農家の減少，  
4 農業経営構造の変化に伴う生活の変化から，野焼きや輪地切りの担い手不足が深刻化して  
5 いる状況にある。大滝（1997）<sup>10)</sup>は，草原の維持管理が困難とした背景に牧野組合などの  
6 ムラ体制の弱体化を指摘している。また，草原維持の困難性については，阿蘇では畜産農  
7 家の減少，現業農家における非農家割合が多いことで，牧野組合など集落の公役である野  
8 焼きはすべて日曜日，祝日に集中し，野焼き日の限定性も挙げられる。加えて，野焼きの  
9 延焼について，牧野組合が負担する延焼保証も，野焼きを実施する牧野組合数の減少原因  
10 要因になっているとの指摘がある。

11

#### 12 IV. 阿蘇グリーンストックの概要

13

14 阿蘇グリーンストックは，1995年にした団体であり，現在は公益財団法人として，阿蘇  
15 の草原をはじめとする資源を後世に残すために活動している。団体設立の経緯や変遷につ  
16 いては，農村の住民と都市の市民が連携して環境にやさしい農林・畜産業の振興を図り，  
17 阿蘇の環境を保全しながら，豊かな余暇空間を創り出すことを目標に，1991年に熊本大学  
18 佐藤誠教授，グリーンコープ生協，熊本 YMACA，保険医協会，地元農家有志が財団法人  
19 阿蘇グリーンストック設立準備会を発足し，1994年に阿蘇町が設立準備会へ正式に参加  
20 したことから展開される。その後，1995年2月に財団設立に向けた基金（出捐金）募集が  
21 開始され，1995年4月に「財団法人阿蘇グリーンストック」が設立された。佐藤（1993）  
22 は，阿蘇グリーンストックの活動は単なる産直運動でもなく，農村リゾート運動論でもな  
23 く，現在の豊かさを問い，行政主導でも企業主導でもない，地域住民と都市の住民参加に  
24 よる新しい運動論で，新しい価値創造を生む運動論でもある<sup>15)</sup>と述べている。グリーンス  
25 トック運動を活動の主軸としており，現在の事業活動の核となる考えにもなっている。

26 阿蘇グリーンストックの組織体制で特筆すべき点は，阿蘇グリーンストックと対等な立  
27 場で野焼き支援ボランティアの会が組織されている点である。阿蘇グリーンストックと野

1 焼き支援ボランティアは、阿蘇グリーンストックが牧野組合を通じた関係自治体からの支  
2 援要請を受けて、野焼き支援ボランティアの会に所属するボランティアを牧野組合に派遣  
3 しているという関係にある。

4 さらに、野焼き支援ボランティアの会の中にはボランティアリーダーと呼ばれる草原保  
5 全活動全般（野焼き、輪地切り支援活動の安全管理等）について中心的な役割を果たすグ  
6 ループが組織されている。

7 。

8 現在、阿蘇グリーンストックは、7つの事業内容を展開している。その事業内容は、大  
9 きく公益事業と収益事業に大別され、公益事業の内訳としては、①自然保全事業（公益事  
10 業1）：草原保全活動(野焼き支援ボランティア活動)、森づくり活動、普及・啓発活動、②  
11 自然体験・農業体験学習事業（公益事業2）：農村体験型修学旅行受入事業、阿蘇子ども農  
12 山村交流プロジェクト受入事業、環境教育事業、③調査・研究事業（公益事業3）：阿蘇の  
13 牧野組合の野焼き・輪地切り実態調査、阿蘇地域の自然資源環境調査がある。収益事業で  
14 は、④特産品販売事業及びあか牛農家への融資事業（収益事業1）：阿蘇あか牛肉や特産品  
15 などの通信販売事業、⑤ゆたっと村宿泊等のサービス事業（収益事業2）、⑥受託調査事業  
16 （収益事業3）、⑦受託管理事業(収益事業4)がある。事業内容の一つとして、自然保全事  
17 業に取り組んでおり、最も重点的に取り組んでいる内容が、野焼きや輪地切りなどの草原  
18 管理を支援する野焼き支援ボランティアの組織化および実施である。

19 現在の阿蘇グリーンストックの組織体制について、阿蘇グリーンストックの職員数は  
20 2023年4月1日時点で10名となっている。職員は、生態学者から野焼き支援ボランティ  
21 ア会員から職員となった者、環境教育の専門家やデザイナーなど多岐にわたる専門性を持  
22 つ職員で構成されている。

23 組織の役員は、2023年8月時点で顧問が2名（熊本県知事、(公財)肥後の水とみどりの  
24 愛護基金理事長）、理事長が1名（阿蘇市長）、副理事長が2名（(株)熊本日日新聞社代表  
25 取締役社長、(元(公財)阿蘇グリーンストック専務理事）、専務理事が1名、常務理事が  
26 2名となっている。理事は、野焼き支援ボランティアの会長代表を含む14名である。評議  
27 員は野焼き支援ボランティアリーダーを含む21名で構成されている。



1 阿蘇グリーンストックの重要な活動である野焼き支援については、発足当初の 1998 年  
2 から、牧野組合の野焼き支援を目的に、九州をはじめ全国から野焼きや輪地切りの草原管  
3 理を行うボランティア（以下：野焼き支援ボランティア）を募っている。また、ボランテ  
4 ィアに参加する際には「初心者研修会」への参加を必須としている。

5 初心者研修会の応募資格は、年齢については高校生以上で、春の野焼き作業や秋の輪地  
6 切り作業に参加可能な体力（山歩きなどが可能な健康な方）のあることが条件となってい  
7 る。初心者講習会では、講義にて草原保全の活動の意義への理解や、火消棒づくりや野焼  
8 き体験が行われ、安全管理対策についての学習機会を設けている。初心者研修会の参加費  
9 は 1 人 1,000 円で、参加者の自己負担となっている。この様な初心者研修を受けた者が、  
10 阿蘇グリーンストックのもとに設立された「野焼き支援ボランティアの会」に入会し、登  
11 録され、阿蘇グリーンストックを通じて、野焼きや輪地切りの持続が困難な牧野組合に派  
12 遣されている。

13 「野焼き支援ボランティアの会」は、2000 年に設立され、現在は、代表 1 名、副代表 2  
14 名が選出され、2023 年度時点で 965 人の都市住民が野焼き支援ボランティア会員に登録  
15 し、延べ人数約 2,300 人の野焼き支援ボランティア会員が草原維持管理支援活動に参加し  
16 ている。野焼き支援ボランティアが行う活動は主に 9 月から 11 月に野焼きの防火帯を作  
17 る輪地切り・輪地焼きの支援活動を行い、翌年 2 月から 3 月にかけて野焼きの支援活動を  
18 行っている。

19

## 20 V. 野焼き支援ボランティア 阿蘇グリーンストック 28 年間の歩み

21

### 22 1. 野焼き支援ボランティア派遣の活動始動期（1991 年～1999 年）

23

24 1992 年に地球サミットが開催され、生物多様性国家戦略では二次草原の保全を含めた  
25 アジェンダ 21 が採択されるなど、二次草原に対する保全が環境政策の課題の一つとなっ  
26 てきた。

27 財団設立初期の事業運営は、阿蘇の草原保全と農林畜産業の振興に向けたあか牛や特産

1 品の産直と水源涵養の森づくり活動が行われていた。しかしながら、1996年に熊本日日新  
2 聞の「阿蘇の草原を守ろう」キャンペーンにより、3,000万円を超える寄付が集まり、そ  
3 の寄付金の運用主体として阿蘇グリーンストックが選択され、以降、阿蘇グリーンストッ  
4 クにおいて草原保全事業が大きな事業となる。その後、寄付をもとに1998年に阿蘇郡175  
5 牧野組合及び牧野の総合実態調査が初めて行われ、阿蘇の草原、牧野及び牧野組合の現状  
6 が把握される。またその成果が、広く社会に発信されたことを契機に、1998年に野焼き支  
7 援ボランティアを試行し、1999年の第1回野焼き支援ボランティアでは当初は数十名程  
8 度の参加を想定していたが、予想を上回る229名のボランティア参加があった。しかし、  
9 この時点で地域の受け入れ牧野組合数は12牧野組合で、全牧野組合数のうち6%に留ま  
10 っていた。

11 牧野組合との関わりからみる阿蘇グリーンストックと地域の連携については、野焼き支  
12 援ボランティア活動は無償のボランティア活動となっており、阿蘇グリーンストックは野  
13 焼き支援ボランティアの派遣団体になっている。現在の野焼き支援ボランティア派遣と事  
14 業構成について、図-1に示した。現在は、牧野組合は阿蘇地域の関係自治体または阿蘇  
15 グリーンストックに直接という形で、野焼き支援ボランティアの要請を行っている。その  
16 要請を受け、阿蘇グリーンストックの事務局側では、野焼き支援ボランティアの募集及び  
17 配置を行う体制となっている。また、牧野組合では、参加したボランティアに対して、地  
18 元負担にて野焼き支援ボランティアに対して温泉券の御礼が配布されていた。

19 草原保全に対する世論の高まりから、1991年から1999年の時期は、阿蘇グリーンスト  
20 ックが阿蘇地域の牧野管理の実態を把握し、草原保全の危機を社会に広く発信し野焼き支  
21 援活動を始動した時期といえる。また、野焼きの人手が足りない牧野に野焼き支援ボラン  
22 ティアを派遣する独自の草原管理の支援システムを開始した時期である。そこで、1991  
23 年から1999年を野焼き支援ボランティア派遣の活動始動期とした。

24

## 25 2. 野焼き支援ボランティアの会の誕生・都市農村交流事業への展開(2000年～2005年)

26

27 野焼き支援ボランティア数の推移を図-2に示した。1999年以降、野焼き支援ボランテ

1    ィア数は増加し、牧野組合からのボランティア派遣要請も増加していった。その中で、阿  
2    蘇グリーンストック財団の事務局（2名）だけでは、野焼き支援ボランティアの調整対応  
3    が困難となっていたことを受け、2000年にはボランティアを会員制度とした組織である  
4    「野焼き支援ボランティアの会」を発足した。

5    以降、初心者講習会などの阿蘇グリーンストックが担っている運營業務に対して、野焼  
6    き支援ボランティアがサポートを行う機会も増加し、組織体制強化の観点から2001年に  
7    は野焼き支援ボランティアにおけるボランティアリーダー制度が発足した。ボランティア  
8    リーダーになる条件は、野焼きの経験が2年以上で年間5回以上の活動実績があること、  
9    且つ現役リーダーからの推薦を受けた人が候補対象となる。候補対象となった本人がリー  
10    ダーとなる意思を示し、その後、ボランティアリーダー養成研修会を受講した人が、野焼  
11    き支援ボランティアリーダーに任命される。ボランティアリーダー養成研修会では、リー  
12    ダーとしての心得、他のボランティアを指揮するための専門知識として、阿蘇の草原の現  
13    状、野焼き支援活動やリーダーの役割の研修、安全管理機材の取り扱い方、救急救命措置  
14    講習が行われている。ボランティアリーダーの人数は、「野焼き支援ボランティアの会」会  
15    則により全会員の約1割にあたる人数と規定されている。また、ボランティアリーダーが  
16    集まる会合として、「リーダー全体会議」が設定され、年4回の会合を実施し、その際には  
17    阿蘇グリーンストックの活動内容や野焼き及び輪地切り支援活動の安全管理について議論  
18    が行われている。ボランティアリーダーは、草原保全活動全般（野焼き、輪地切り支援活  
19    動の安全管理等）について中心的な役割を果たしている。

20    同時期頃の2002年からは、阿蘇グリーンストックの新規収益事業として、ファームステ  
21    イ、農業体験型修学旅行が開始されている。加えて、2004年からは都市と農村をつなぐ草  
22    原保全の取組としてあか牛オーナー制度が始まった。あか牛オーナー制度の目的は、都住  
23    民から資金を募って阿蘇地域の草原で放牧される繁殖牛の導入を促進し、併せて資金分の  
24    あか牛肉を返礼品として都市住民にお返しするというあか牛の消費拡大の一面をもった事  
25    業でもある。あか牛のオーナー制度は、オーナー希望者が30万円の資金を出し（2人また  
26    は3人の共同での契約も可能）、阿蘇グリーンストックが無利子であか牛繁殖農家（オー  
27    ナーあか牛受入れ農家）に貸し付けを行う。オーナー受入れ農家は、30万円を元手にあか

1 牛の繁殖牛を導入し、阿蘇の草原で5年間放牧飼育を行い、5年間で阿蘇グリーンストック  
2 クに30万円を返済する仕組みとなっている。あか牛オーナーは、5年にわたってオーナー  
3 牛とのふれあい、牛の名前付け、年に2回開催されるオーナー牛受入れ農家との交流がで  
4 き、さらに、毎年6万円分、計30万円分のあか牛肉を利用できる制度となっている。

5 2004年には野焼き支援ボランティア等が宿泊可能な古民家を中心とした里山体験交流  
6 施設「ゆたっと村」がオープンする。「ゆたっと村」では、梅やブルーベリー、栗、椎茸等  
7 の収穫体験などの様々な農業体験ができる宿泊施設である。また、「ゆたっと村」はボラン  
8 ティアの宿泊施設としても活用されており、都市部からの参加者の前泊、後泊の拠点にも  
9 なっている。ゆたっと村には、会員制度もあり、年間費3,000円で「ゆたっと村」の村民  
10 (会員)になることができ、宿泊費、あか牛バーベキュー代の割引が適用される。その他、  
11 農作業の参加、「ゆたっと村」の周辺地区で生産されたこしひかり(2.5kg)が届く特典と  
12 なっている。「ゆたっと村」という宿泊施設ができたことで、遠方からの野焼き支援ボラン  
13 ティアの宿泊拠点ができ、ボランティア会員同士の農体験を通じた交流のイベント機会も  
14 増えた。また、2004年からは「阿蘇の緑と水を守るグリーントラスト募金開始」という草  
15 原をトラスト地として買い取る募金活動が始まり、阿蘇の草原保全のための資金も集まる  
16 ようになってきた。

17 2000年から2005年には、「野焼き支援ボランティアの会」が発足し、ボランティアリ  
18 ーダーの誕生など市民による野焼き支援ボランティア団体が組織化されという運営の変化  
19 が確認された。さらに、都市と農村をつなぐ「あか牛オーナー制度」や「ゆたっと村」な  
20 ど地域とのかかわりからみると都市農村交流事業が拡充した時期であり、「野焼き支援ボ  
21 ランティアの会の誕生・都市農村交流事業への展開期」とした。

22

### 23 3. 阿蘇の草原再生のステークホルダーと野焼き支援ボランティア会員の拡大期(2005年 24 ~2011年)

25 2005年には、阿蘇グリーンストック設立から10周年を迎え、阿蘇グリーンストック活  
26 動に対する社会的信用が高まり、各施策に関するステークホルダーとしての役割を果たす  
27 機会が増えていく。2005年12月には環境省、熊本県、阿蘇市町村会、阿蘇グリーンスト

1 ックが呼びかけ団体となり自然再生推進法に基づく「阿蘇草原再生協議会」が発足し、(団  
2 体 61, 個人 42 名) し、阿蘇の草原再生の目標、保全計画が計画された。この中で、阿蘇  
3 グリーンストックは、牧野組合の支援の立場から、牧野管理のステークホルダーとして重  
4 要な役割に位置付けられる。

5 2006 年には、これまで阿蘇で開催されてきた「初心者講習会」が、熊本市内で講座のみ  
6 の開催が行われるようになった。その結果、熊本市近郊の都市住民が気軽に参加しやすく  
7 なり総勢 200 名が初心者講習会に参加した。また、初心者講習会用のビデオ製作が行われ  
8 るなど、野焼きに関する講習会プログラム体制の充実が図られ、都市住民、若い年代を対  
9 象にいた新規のボランティア会員の募集活動が行われるようになった。

10 阿蘇グリーンストックの事業では、地域との対話を受けて、都市農村交流事業が拡充し、  
11 2006 年にはファームステイ事業で 8 校 845 名(2006 年 9 月の実績)を受け入れとなっ  
12 た。その際、各地区で受け入れ農家への報告と懇親会が開催され、地元のファームステイ  
13 受入れ農家との連携がより一層図られるようになる。

14 2007 年には、2004 年から開始された草原をトラスト地として買い取るグリーントラス  
15 ト募金と維持賛助会員の積み立てにより草原ナショナルトラスト第 1 号として、波野地区  
16 の草原 2.5ha を取得した。

17 2008 年 7 月 12 日には、阿蘇グリーンストックの野焼き支援ボランティア活動が 10  
18 周年を迎え、延べ 1,900 名のボランティア会員数となり、大規模なボランティア団体とな  
19 っていく。

20 2009 年には、NHK や ANA の機関紙「翼の王国」などで野焼きの活動が取り上げられ  
21 るようになり、阿蘇グリーンストックの知名度も高まっていった。野焼き支援ボランティ  
22 ア会員が増加していく中で、2009 年には牧野組合からの要請を受けて、10 年以上野焼き  
23 の実施がなかった日の尾牧野などの 3 牧野にて野焼きが実施された。2009 年にはグリー  
24 ンストックの事務局ブログが開設され、SNS を通じたボランティア会員間での交流機会も  
25 増えていった。

26 その中、2010 年には阿蘇地域の牧野組合において野焼き作業中での事故が発生した。こ  
27 の事故を受け、牧野組合、行政、ボランティアリーダー間での協議を重ね、「野焼き・輪地

1 切りのための安全管理対策マニュアル」の作成を行っている。2010 年度には、野焼き支援  
2 ボランティアの延べ活動人数が 2,000 人を超え、野焼き支援ボランティア会員の規模もよ  
3 り大きくなっていった。

4 同じく 2010 年には、阿蘇グリーンストックが呼びかけ団体となり、阿蘇草原再生協議  
5 会の活動を支えることを目的として、行政、経済界、学会、報道機関で構成する阿蘇草原  
6 再生千年委員会を設立し、草原再生のステークホルダーとしての役割が増していった。

7 2011 年には、野焼き支援ボランティアリーダーが誕生して 10 年目となり、リーダー数  
8 は 70 名を超えるようになる。そこで、野焼き支援ボランティアリーダーとして必要な知  
9 識、共通認識、作業基準などの情報を掲載したリーダー手帳が製作された。また、若いボ  
10ランティア会員を確保するために、くまもんイラスト起用したチラシ、熊本のタウン誌、  
11 ホームページ、Facebook などの SNS で発信での広報活動を展開していった。

12 阿蘇グリーンストックの事業では、阿蘇グリーンストックの公益財団法人化に伴い、収  
13 益事業を引き継いだ株式会社 GS コーポレーションが設立され、あか牛肉やその加工品、  
14 農作品、加工品の販売が事業継続となった。

15 2005 年～2011 年には、阿蘇グリーンストックが設立 10 周年を迎え、社会的信用とメデ  
16 ィアでの報道数の増加を背景に、その知名度は高まっていった。また、ボランティア会員  
17 が延べ 2,000 名を超えるなど、ボランティア組織が成長した時期でもある。また、10 年ぶ  
18 りに野焼きを行う牧野組合への支援を行うなど、阿蘇草原再生の担い手としての役割も大  
19 きくなっていった。さらには、阿蘇グリーンストックは阿蘇草原再生協議会や阿蘇草原再生  
20 千年委員会においてステークホルダーとして重要な役割を担うようになる。そこで、2005  
21 年～2011 年を「阿蘇の草原再生のステークホルダーと野焼き支援ボランティア会員の拡大  
22 期」とした。

23

#### 24 4. 野焼き支援ボランティアの安全管理の強化と災害時の地域復興（2012 年～2015 年）

25

26 2012 年 4 月 7 日に、阿蘇グリーンストックにとって野焼き支援ボランティアにおける  
27 大きな事故が発生する。これまで無事故で野焼き支援活動を行ってきた阿蘇グリーンスト

1 ックであったが、波状の丘陵地で草原の維持管理の困難度が高いとされていた阿蘇グリー  
2 ンストックが管理・所有するトラスト地（波野）の野焼き作業にて、野焼き支援ボランテ  
3 ィアリーダーが巻き込まれ、翌日死亡する事故が発生した。阿蘇グリーンストックでは野  
4 焼き作業での事故を受けて、事故の検証を行うと共に、今後の安全対策について話し合う  
5 安全対策特別委員会の設置、牧野組合や市町村を交えた相談会を開催した。2012年7月  
6 の総会で、事故の検証説明、今後の活動についての意見交換会を行い、今後の活動に向け  
7 て安全対策マニュアル、ヒアリハット集などの製作が行われることとなった。現在では、  
8 年2回の頻度で安全管理対策に関する議論の機会が設けられ、毎回の野焼き支援ボランテ  
9 ィア作業の時には、ボランティアリーダーから事務局に対して、事故やケガに関する報告  
10 が行われる体制が構築されている。

11 2012年9月にはご遺族の承認、リーダー全体会議での確認を得て、輪地切り支援のボ  
12 ランティア活動、翌年春には野焼き支援のボランティア活動が再開された。2014年4月7  
13 日には、野焼き事故の慰霊碑が完成し慰霊祭が行われた。現在でも、阿蘇グリーンストック  
14 では4月7日を慰霊の日と定め、野焼き支援活動を行わずにトラスト地で慰霊祭を行っ  
15 ている。

16 2012年7月12日は、「九州北部豪雨」により牧野組合、牧野組合も牧野の自宅、牛舎  
17 などの被害を受け、阿蘇グリーンストックは被害状況をボランティアやあか牛オーナーな  
18 どに伝え災害支援を実施した。

19 2013年は、「阿蘇の草原の維持と持続的農業」として、国連食糧農業機関（FAO）の世界  
20 農業遺産に認定された。2014年には、阿蘇では阿蘇火山の大地と草原などの人間生活に関  
21 する評価を受け、世界ジオパークネットワークに認定加盟を受けた。このように、阿蘇の  
22 草原は、世界農業遺産や世界ジオパーク等に認定され、阿蘇の草原の国際的価値も高まっ  
23 ていった。

24 2014年からは、後継者育成として、牧野の若い後継者に安全管理の火引きの技を継承す  
25 ることを目的とした講習会と現地研修会が開催されるようになる。

26 2015年2月に開催された初心者研修会からは、参加者から休みが取りにくいという声  
27 があったことを背景に、これまでは阿蘇地域で2日間にわたる研修プログラムを行ってき

1 た日程を、1日で終了する初心者研修プログラムが実施された。さらに、2015年4月には  
2 阿蘇草原保全活動センターがオープンし、阿蘇グリーントックの活動拠点及びプラットフ  
3 ォームができる。

4 2015年9月14日には、阿蘇中岳噴火に伴い、観光業において風評被害の影響を受けた  
5 が、阿蘇グリーントックでは中岳噴火後も観光、修学旅行等の安全性を広くアピールし  
6 ていった。2015年は、民泊ブームでファームステイの希望者が増え、ファームステイ受入  
7 家庭に向けた「安全・衛星管理講習会」を開催した。

8 このように、阿蘇グリーントックでは野焼き事故を受けて、牧野組合と共に事故を検  
9 証し安全管理マニュアルを策定したことにより、野焼きの安全管理技術が野焼き支援ボラ  
10 ンティアや地域内で一層強化され共有されるに至った。また、阿蘇の草原は、世界農業遺  
11 産や世界ジオパーク等阿蘇の草原の国際的価値も高まっていった。一方で、九州北部豪雨  
12 や中岳噴火等の自然災害が増える中、阿蘇グリーントックはいち早く地域の牧野組合の  
13 支援を行い、都市住民に対して阿蘇の被害状況を的確に発信し風評被害の対策を行った。  
14 以上のことから2012年から2015年を「野焼き支援ボランティアの安全管理の強化と災  
15 害時の地域復興期」とした。

16

## 17 5. 熊本地震からの生活再建と観光振興による草原再生（2016年から2019年）

18

19 2016年4月14日及び4月16日に発生した熊本地震（マグニチュード7.3）では、24  
20 名の尊い人命が奪われ、土砂による地域分断や家屋の損壊等甚大な被害をもたらした。阿  
21 蘇グリーントックでは、熊本地震発生3日後の2016年4月19日に牧野の被害状況を  
22 把握し、さらに地震発生11日後の2016年4月27日には、野焼き支援ボランティアの会  
23 員に対して牧野への義援金を募集した。義援金は4か月間で約280万円も集まり、11牧  
24 野に25万円ずつ贈呈した。

25 阿蘇グリーントックでは、熊本地震における緊急支援活動について、主に3つの支援  
26 を行った。第一に「防火帯整備」を行い、草原の亀裂により野焼きが困難な状況となった  
27 牧野に重機で牧野を整備し、野焼き再開の支援を行った。第二に「牧野道整備の修復」を



1 行い、地震により寸断された牧野道の修復を行った。第三に「災害支援活動」を行い、崩  
2 壊した牧野への牛馬の滑落防止となる牛馬の柵づくりや、熊本地震で崩壊した納屋や牛舎  
3 の修復作業を実施した。

4 また、都市農村・交流からみた取り組みは、2017年4月20日は熊本地震後初めてとな  
5 る修学旅行民泊を阿蘇グリーンストックが受け入れた。2017年10月から福岡発と熊本発  
6 で、震災を受けた草原のために輪地切り（野焼きの防火帯作り）と、赤牛バーベキューや  
7 阿蘇の温泉を楽しむ観光ツアーを企画し、119名の参加者が集まった。これらの阿蘇グ  
8 リーンストックによる生活支援や観光による復興の取り組みは、熊本県からの助成や株式会  
9 社キリンの絆プロジェクトやコカ・コーラ等の民間企業の寄付により実施された<sup>16)</sup>。

10 2017年の2月と3月の野焼きでは、熊本地震の発生により野焼きの見合わせを行う牧  
11 野もあったが新規の牧野の要請がみられた。

12 2017年の8月のファームステイでは、「未来へ紡ぐリレープロジェクト読売新聞社企画」  
13 が実施され、熊本地震の復興を題材とした防災学習が行われた。

14 2017年10月28日には、第1回ASO草原フェスティバルが開催され、阿蘇郡市から  
15 30店舗の出店、あか牛の丸焼き試食200個、ステージイベント開催など熊本地震の復興  
16 に向けたイベントが開催された。

17 2018年からはYahooネット基金に「阿蘇草原再生募金ページ」を開設し、Tポイント  
18 やクレジットカードなどで、インターネットでの募金活動も展開される。しかし、熊本地  
19 震により阿蘇地域でのファームステイが激減したため、阿蘇グリーンストックでは、農水  
20 省からの助成を受け、防災学習パンフレットや道路等の復興予定の資料を持参し、大阪、  
21 香川の学校、教育委員会、新聞社に対しファームステイの販促活動を2019年から行うよ  
22 うになった。

23 また、草原の資源管理の活動では、2018年から野焼き支援ボランティア及び地元牧野組  
24 合員による茅刈体験と事業化検討会、茅束の輸送実験、品評会を実施し「阿蘇の茅財」の  
25 商品化の価値を検証する茅の実証実験が着手された。2019年度は4000束（茅葺屋根の片  
26 屋根分程度）を目標に茅刈の取り組みが行われ、野焼き支援ボランティアがグループ5～  
27 15名の単位となる茅刈方法を試行し、効率的茅刈技術の検討も開始した。

1 以上のことから、熊本地震の復興に向けて阿蘇グリーンストックがいち早く牧野組合の  
2 生活再建や野焼き再開、さらには、イベントやツアーの開催により観光・交流からの復興・  
3 草原再生に寄与した 2016 年から 2019 年を「熊本地震からの生活再建と観光振興による  
4 草原再生期」とした。

5

## 6 6. 多種業とのコラボレーションによる草原保全（2020 年～2023 年）

7

8 2020 年には COVID19 によるパンデミックが発生し、全国のボランティア活動にも大  
9 きな影響を及ぼしたが、阿蘇グリーンストックの活動では 11 月の輪地切り・輪地焼き支  
10 援活動には 231 名と例年通りの参加者数となった。

11 2020 年からは、野焼き支援ボランティア会員の高齢化による人員不足を背景に、リーダ  
12 ー育成の年齢制限を外し、ボランティアリーダーの増加を図った。しかしながら、野焼き  
13 支援ボランティアの高齢化については、現在も進行しており、若手の野焼き支援ボランテ  
14 ィア会員の確保などは運営上のより一層な課題となっている。

15 2021 年には GS コーポレーションがあか牛 1 頭買いプロジェクトを始めた。このプロ  
16 ジェクトは、阿蘇の草原にて放牧し、阿蘇のススキや稲わらで飼育された草原とのかかわ  
17 りが深いあか牛まるごと 1 頭を GS コーポレーションが購入し、予約制で販売する仕組  
18 みとなっている。

19 同じく、2021 年には熊本県が、草原維持に積極的に取り組む企業・団体を支援し、新  
20 たな担い手や財源を確保することを目的にした「阿蘇草原応援企業サポーター認証制度」  
21 を創設した。その制度について、阿蘇グリーンストックでは、草原応援企業サポート認証  
22 制度の問い合わせ窓口の一つを担っている。観光面からは、2021 年からは阿蘇の草原を利  
23 用した e-bike 等のアクティビティツーリズムが展開するようになる。阿蘇市の草原ガイド  
24 の認定研修会では、阿蘇グリーンストックが草原利用の研修を担当し、草原ガイドの人材  
25 育成にも貢献している。

26 2023 年には、2014 年から専務理事をつとめていた桐原氏から 30 代の若手の増井氏に  
27 専務理事が世代交代され、新たなボランティアの活性化や企業連携の枠組み作りに努めて

1 いる。2022年には、熊本市であか牛を試食する草原のイベントが開催され、若い都市住民  
2 をターゲットにした草原保全のボランティア誘致活動が展開されるようになった。

3 2023年2月には、三井住友海上火災保険（東京）が、熊本県阿蘇地域の野焼きに伴う火  
4 災などに備えた「野焼き専用」の保険制度を創設した。これまで野焼きの延焼補償は牧野  
5 組合が行っており、牧野組合の大きな負担となっていた。その課題の中で誕生した「野焼  
6 き専用」の保険制度は阿蘇グリーンストックや環境省、熊本県らの尽力により創設された。

7 2023年には、野焼き支援ボランティア有志が「茅場はあるが茅刈ができない牧野」を支  
8 援する茅刈を行った。その結果、4,684 茅束を製作することができた。阿蘇の茅事業につ  
9 いては大阪万博 2025 や、広島県の大規模茅葺屋根材量と問い合わせがあり、阿蘇の茅資源  
10 の商品化も認知されるようになってきている。

11 2023年10月には、サイクルロードレース「ツール・ド・九州」が開催され、草原を「走  
12 って守る」イベントを展開している。そのイベントでは、野焼き支援ボランティア140名  
13 も運営等に参加し、その結果、ツール・ド・九州運営事務局より草原再生募金への寄付を  
14 集め、草原を活用することで保全にもつながる好事例を作ることができた。

15 2023年9月には阿蘇グリーンストックのトラスト地にて、環境省が認定する自然共生  
16 サイトに2か所登録された。また、2024年2月にはこの場所を活用してJALの社会貢献  
17 活動が実施される予定であり、ますます企業が阿蘇の草原保全に関わる機会の創出が進ん  
18 できている。

19 このようにCOVID-19のパンデミックの中でも、屋外での草原管理活動は継続され、ま  
20 た、野焼き保険制度など、野焼きを継続するための新しいシステムが構築されるようにな  
21 った。さらに、草原利用と草原保全を組み合わせたイベントの実施や、多様な企業との連  
22 携も始まり、草原保全と新しいイノベーションを期待する動きがみられた。そこで2020年  
23 から2023年を「多種業とのコラボレーションによる草原保全期（2020年～2023年）」と  
24 した。

25

## 26 VI. 総括

27 本研究は、28年間の阿蘇グリーンストックの活動内容の変遷から、団体の活動継続と

1 地域連携の関係性について考察を行う。

2 1点目は「牧野（地域）に野焼き支援ボランティアを派遣するという活動目標の明確性  
3 と安全管理を含めた野焼き支援体制の構築」である。阿蘇グリーンストックでは、野焼き  
4 の主体は地域の牧野組合とし、牧野組合の野焼きを「支援する」という立場を28年間一貫  
5 してきた。そして、28年間の歩みの中で草原維持管理の支援技術と安全管理を構築してき  
6 た。阿蘇グリーンストックの安全管理対策は、野焼き支援ボランティアを受け入れる牧野  
7 との信頼構築が図られ、地域とのかかわりを保ちながらの活動継続に繋がっていると考え  
8 られた。さらに、阿蘇グリーンストックに野焼き支援の要望依頼が増加する中で、事務局  
9 とボランティアリーダーが牧野組合との調整、参加するボランティアの安全管理や、参加  
10 募集、研修体制のPDCAサイクルをはかり、指揮系統や役割分担が明確な組織運営を行っ  
11 てきた。加えて、野焼き支援ボランティア会員や牧野組合との交流も行われ、「草原保全を  
12 担う活動意義や喜びを仲間と共有すること」<sup>17)</sup>機会が野焼き支援ボランティア会員の活動  
13 のモチベーションの維持・継続につながってきたと考えられる。

14 2点目は、「阿蘇の農畜産業を基軸とした都市農村交流事業の展開」である。阿蘇グリー  
15 ンストックでは、都市農村交流事業としてファームステイ、あか牛オーナー制度や一頭買  
16 い、草原ツアーや茅刈事業等、阿蘇の農畜産業を基軸とした新しい草原の利活用や都市農  
17 村交流事業を都市住民（消費者）、畜産農家と連携し創出してきた点が挙げられる。

18 3点目は、社会情勢の要望を受けながら「草原保全の危機や水害、熊本地震などの自然  
19 災害、COVID19など困難な局面にも重要なステークホルダーとして、地域の再生・復興  
20 をけん引してきた点」が挙げられる。また、2023年に誕生した野焼き延焼保険制度の創設  
21 等、草原管理が抱える社会的課題に対する新しい制度設計にも貢献している点は大きい。  
22 これらの社会的役割から地域内外の多業種の企業、住民、市民からの信頼関係も構築され  
23 ていると考える。

24 今後の課題としては、阿蘇グリーンストックの活動のさらなる展開を目指す上で、野焼  
25 きの安全管理や活動内容の情報連絡等の効率化を図るためにICTやSNSなどの積極的な  
26 活用が挙げられる。また、阿蘇グリーンストックでは野焼き支援ボランティアの将来シミ  
27 ュレーションとして地元と野焼き支援ボランティアを合計して地域全体で8,500人が必要

1 と算出している。野焼き支援ボランティアの延べ人数は 2011 年以降 2,000 人を超えてい  
2 るが、地域で野焼きに関わる人数は年々減少傾向にあり 2022 年時点で 5,572 人となっ  
3 ている（図-3）。今後、地域住民に合わせてボランティアの高齢化が進む中で、ボラン  
4 ティア会員の参加を促すための新しい草原活動のかかわり方の提案などが必要と考えられる。

5

6

7 謝辞

8 本研究を実施するにあたり公益財団法人「阿蘇グリーンストック」事務局井上聡美さんに  
9 貴重なご助言を賜りました。井上様の長年にわたる阿蘇グリーンストックでのご尽力に敬  
10 意と心からの謝意を表します。また本研究の成果の一部は、トヨタ財団 2022 年度研究助  
11 成プログラムの助成を受け実施いたしました。

12

13 注および引用文献

14 1) 宮林茂幸編著『森を活かし森にいきる』東京農業大学出版, 2023 年, 3~47 頁

15 2) 環境省『今後の自然公園制度のあり方に関する提言』, 2020 年, 10 頁

16 3) 土屋俊幸「森林における市民参加論の限界を超えて(統一テーマ:転換期における林業経  
17 済研究の課題,1999 年春季大会論文)」,『林業経済研究』Vol. 45(1), 1999 年, 9~14 頁

18 4) 山本信次「市民参加・森林環境ガバナンス論の射程: 森林ボランティアの役割を中心  
19 として」『林業経済研究』Vol. 56(1), 2010 年, 17~28 頁

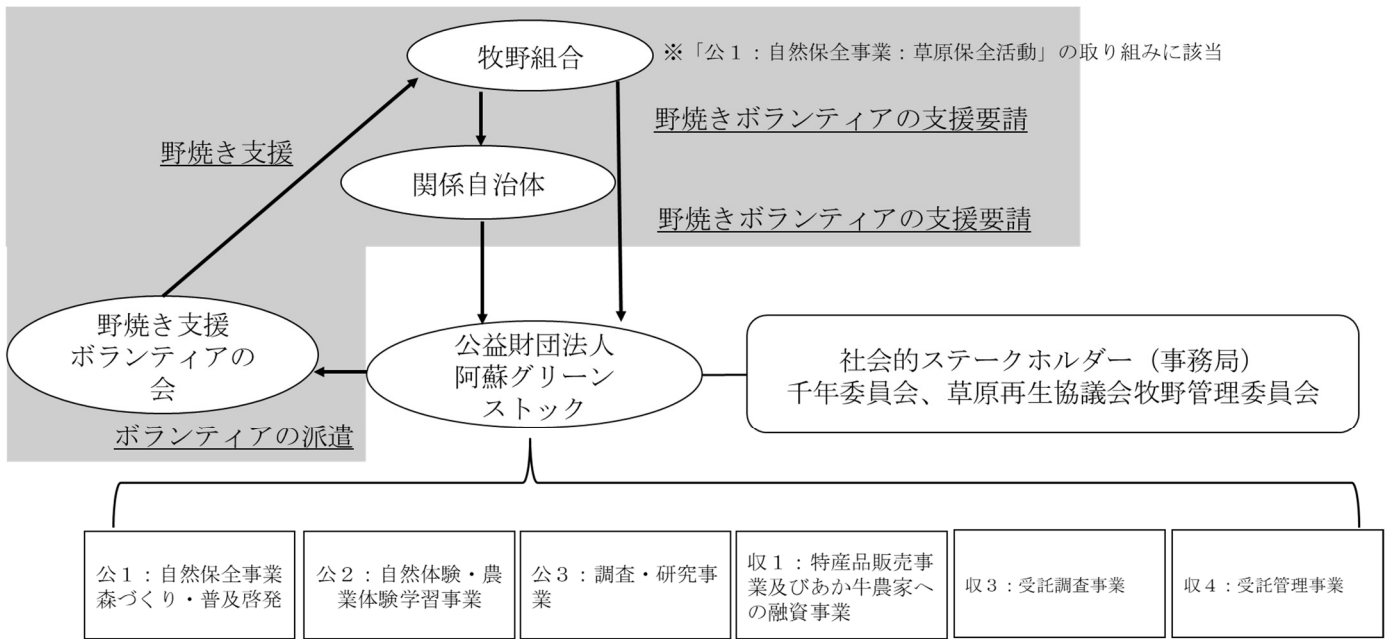
20 5) 土屋俊幸「「解題」林業経済研究の視点とは何か」『林業経済研究』Vol. 62(1), 2016 年,  
21 4~6 頁

22 6) 栗山浩一「自然資源管理における市民の視点」『林業経済研究』Vol. 62(1), 2016 年,  
23 28~39 頁

24 7) 富井久義「森林ボランティア活動における社会的意義の語られかた—都市住民が形成す  
25 るcommonsとしての鳩ノ巣フィールド—」『環境社会学研究』Vol. 23, 2017 年, 99~113 頁

26 8) 平原俊「自然資源管理に関する市民参加論の「限界」再考(論文)」『林業経済研究』Vol.  
27 75(3), 2022 年, 1~16 頁

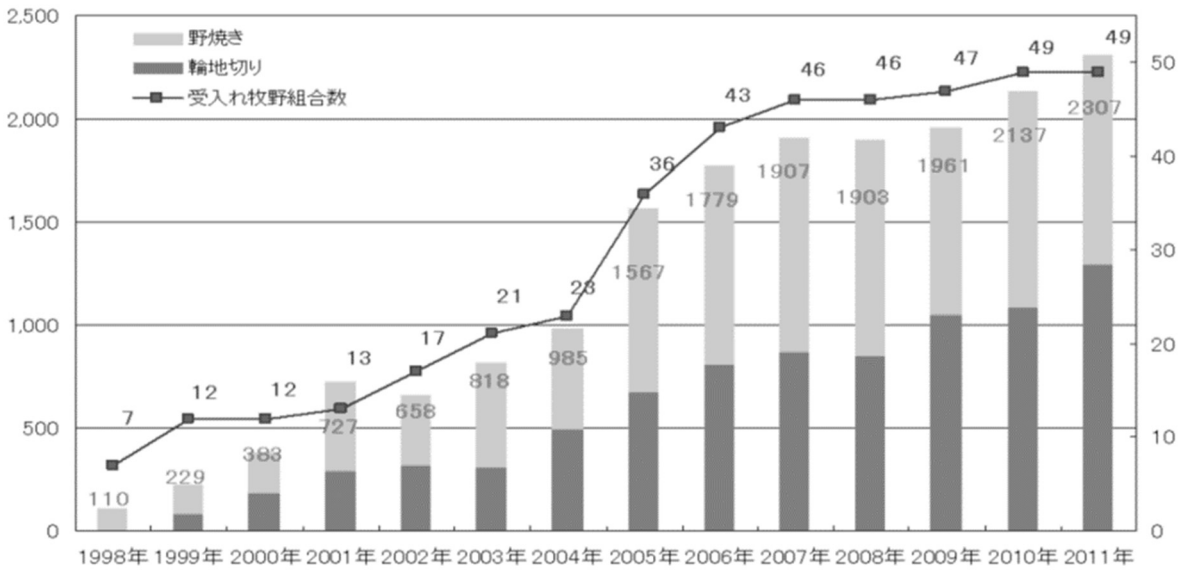
- 1 9) 熊本県「阿蘇草原維持再生基礎調査」, 2023年1月12日参照,  
2 <https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/21/130162.html>
- 3 10) 大滝典夫『草原と人々の営み: 自然とのバランスを求めて. 自然と文化・阿蘇選書 10—  
4 阿蘇 一の宮町史』一の宮町, 1998年, 14~40頁
- 5 11) 阿蘇グリーンストック「公益財団法人阿蘇グリーンストック中期構想」, 2023年1月  
6 12日参照, [http://www.asogreenstock.com/wp-content/uploads/2022/06/mid\\_term.pdf](http://www.asogreenstock.com/wp-content/uploads/2022/06/mid_term.pdf)
- 7 12) 阿蘇グリーンストック「草原だより」Vol.4~95, 1999~2023年
- 8 13) 湯本貴和「野と原の環境史(シリーズ日本列島の三万五千年—人と自然の環境史)」文  
9 一総合出版, 2011年, 68~89頁
- 10 14) 高橋佳孝「阿蘇地域における農耕景観と生態系サービス—文化的景観「論で地域価値  
11 を再発見し世界文化遺産登録を支援」農林統計出版, 23~58頁
- 12 15) 佐藤誠「阿蘇グリーンストック」石風社, 1993年, 155~219頁
- 13 16) Machida, R. (2021) The Kumamoto Earthquake's Creative Reconstruction Effort  
14 Led by a Diverse Range of Organizations. International Journal of GEOMATE 21, 86 –  
15 92
- 16 17) 町田怜子, 愛甲哲也, 松島肇, 武正憲, 庄子康, 御手洗洋蔵, 三上直之「阿蘇くじゅう  
17 国立公園における二次草原保全活動ボランティアの活動継続と制約の要因」『ランドスケ  
18 ープ研究』Vol. 85(5), 2022年, 637~640頁  
19 (2023年11月28日受付; 審査中)
- 20  
21 図表



1  
2 図-1. 阿蘇グリーンストックの組織体制及び野焼き支援ボランティアの派遣体制

3 資料：阿蘇グリーンストック組織図を参照

4 注：資料より筆者作成

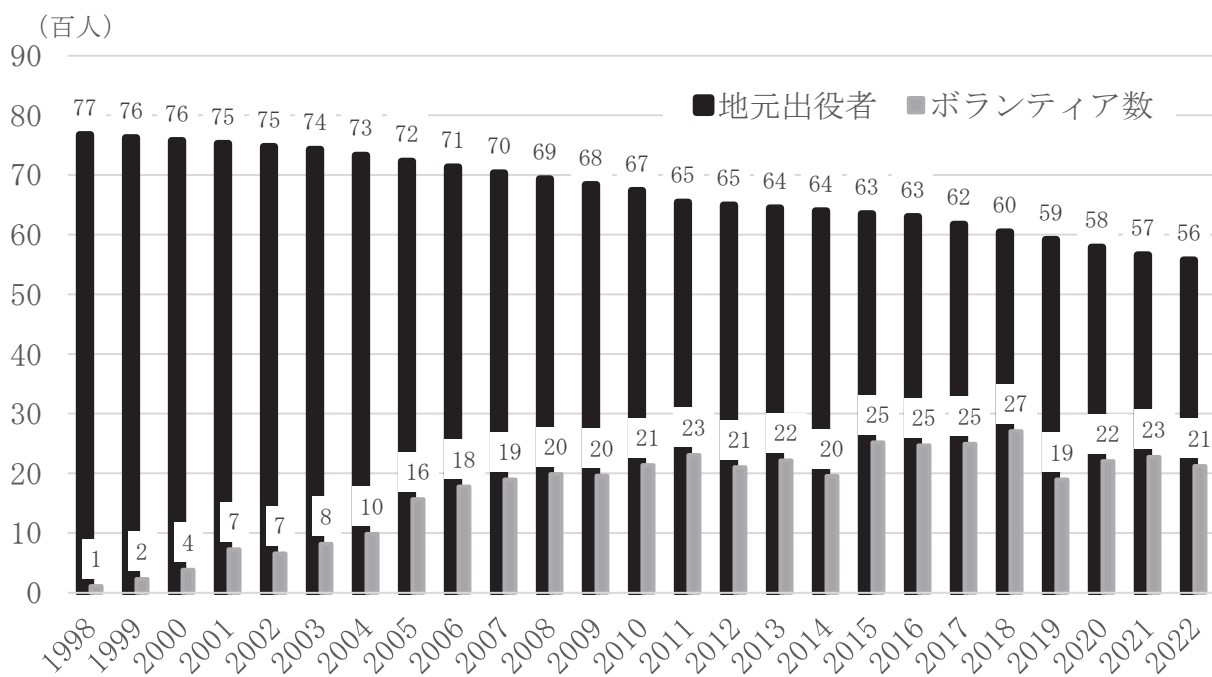


5  
6 図-2. 野焼き支援ボランティア人数と受け入れ牧野組合数の推移

7 資料：環境省阿蘇草原再生推進協議会資料（2011）

8 注：資料より筆者作成

9



1

2 図-3. 阿蘇地域における地元出役者（野焼き支援ボランティアを含む）と野焼き支援ボラ  
 3 ンティア数の推移

4 資料：阿蘇グリーンストック提供資料（2023年1月14日時点）

5 注：資料より筆者作成